

教育的意義のあるプレースメントテストとは？

ープレースメント場面での自己評価ー<sup>1</sup>

## Educational Merit of Self-assessment as a Japanese Language Placement Instrument: The Perspective from Learner Autonomy

トムソン木下千尋

### 要旨

自律学習は学習者中心の言語教育の流れをさらに進めたもので、学習者の多様化の現実の中で、注目されてきている。自己評価はその自律学習を行う上で基本要素である。本論では、プレースメントという評価場面における現行のテスト2例と自己評価を Stern(1987)の理論的枠組み、Brindley(1990)の視点の2観点から検討する。結果、現行のテストは教育の指針に貢献するところが少なく、学習者はテストの実施やプレースメントの決定には関与していないことがわかった。本論は、教師によるプレースメントと自己評価によるプレースメントを併用することで、学習者のインプットを吸収し、しかも、学習者の自律を奨励する、教育全般に貢献できる評価場面を実現できるとする。

【キーワード】日本語教育 自律学習 自己評価 プレースメントテスト 評価の教育的意義

### 1. はじめに

今年の3月に東京で行われたテストに関する研究集会で、プロティゼ・ウッドフォード氏は「テストにできるただひとつのことは情報を提供することである。」(訳責筆者)(1997, p.4)と述べた。テストが情報を提供することによって異存はないが、テストにできることがそれだけだというのは、賛成しかねる。入試英語が日本における学校英語教育に、また、日本人の英語会話力(の欠如)にどれだけ大きな影響を与えてきたかは、ここに述べるまでもない。テストは直接の目的である情報を得ること以上に影響力があることを念頭に作られ、利用されるべきである。山田(1996)は、日本語教育では「日本語」の面が重視され、「教育」の面が軽視されてきたのではないかと問い掛けているが、日本語教育のテストによる評価においても同様のことが言えるのではないか。テストの持つ2面性、つまり、技能を計る面と教育の指針となる面のうち、テストが教育の指針にどのような示唆を与えるかは、ほとんど議論がなされてい

ないようだ。

本論では、日本語教育の立場から、プレースメントという評価場面における現行のテストと自己評価を検討する。

## 2. 自律学習と自己評価

現代の教育の現場では、急速な社会の変化、多様化、そして進歩の波に遅れない学習者を育成するために、自律学習能力、自分の学習を自分で管理していただける能力、の開発が重要だ。自律学習能力は1人で孤独な学習をするということではなく、クラスメートや教師、周辺の母語話者などの人的リソースから協力を得ることのできる力をも含めた総合的な学習能力で、学習環境を整えることから、学習目標の設定、学習活動の決定と運行、その評価にいたるまで学習者自身が核となって進めていく学習である（田中・斉藤 1993、Knowles 1980）。学習者の多様化への対応策の一つとして、学習者の自律学習能力の開発は大きな意味を持つ。一律のシラバスで多様な学習者を縛るよりも、学習者それぞれが個性を生かして自分なりの学習を効果的に進めていける環境造りをはじめ、学習者の自律学習能力を伸ばす支援をするのが教師の役目であるという考え方だ（岡崎 1992）。

自律学習における正確な自己評価は、学習の評価自体と共に学習の軌道修正、次段階の学習の計画にも重要である。学習者による自己評価の利点は様々だが、主なものを挙げてみる。

- ①学習者が現実に達成可能な目標設定をする能力を養うことができる。
- ②学習者が自分の進歩の度合に責任をもつことができる。
- ③学習者が自分のスキルについて診断し、把握することができる。
- ④学習者が自分の言語行動をモニターする基準を自己開発する手助けとなる。
- ⑤学習者が自分の評価に参加できることから学習者中心の評価形式である。
- ⑥学習者が教育機関における学習が終わったあとも自律的な学習が継続できる能力を養う。（岡崎・吉武 1992）

## 3. 調査

### 3-1 調査の目的と方法

世界的な学習者の増加、多様化傾向につれて、日本語プログラム運営に際して大きな問題になってきているのが学習者のプレースメントである。プレースメント、つまり、学習者をどのレベルのどのクラスに入れるのが最適であるか

の決定である。現行のプレースメントテストから、さまざまな形式のテストを組み合わせ、プレースメントに利用している例として、ニューサウスウェールズ大学（以下 NSW 大学）のプレースメントテスト、そして、最近注目をされ、世界各地で使用が始まった SPOT(Simple Performance-Oriented Test)の 2 例を挙げ、自己評価によるプレースメントと比較する。上記 3 者の実情の記述に続き、Stern(1987)の総合的外国語教育に関する理論的枠組み、Brindley(1990)の評価を見る視点の二つの観点から分析する。

### 3-2 3 種のプレースメントテスト

#### 3-2-1 NSW 大学のプレースメントテスト

NSW 大学のプレースメントテストは各地で現行のプレースメントテストの典型的なものではないかと思われる。学生の総合的な力を判断し、最適なレベルに入れていくために、筆記（漢字、文法、読解、小作文）、面接試験、学習者の背景調査の結果をすべて見て、プレースメントを行っている。この方法では年間約 100 件中 2 件程度のプレースメント・ミスがある程度で、経験的に信頼が置けるテストといえる。

#### 3-2-2 SPOT

SPOT は、1990 年に筑波大学の留学生センターで試用され、同センターの従来からのプレースメントテストの総合点と高い相関を示して（小林 1997）以来、世界各地、オーストラリアのモナッシュ大学、アメリカのカリフォルニア大学サンディエゴ校、アイオワ大学、韓国の全北大学校などで試用、使用されている<sup>2</sup>。テストの形式は、テープを聞きながら、ひらがな 1 字の穴埋めをしていくというもので、聞く、読む、書くの三つの作業が同時に行われなければならない点から、ユニークなものである。テープを聞きながら穴埋めをしていくことから、10 分程度の時間制限のあるテストとなっている。

#### 3-2-3 自己評価

ここで扱うプレースメント場面の自己評価は、学習者が話す、聞く、読む、書くの四技能それぞれについてレベル別の記述のある自己評価票（添付資料参照）を渡され、自分の言語能力に最も近い記述を選ぶというものである。自己評価票は、かなり具体的に状況説明のあるオーストラリア第二言語能力規準の英語の自己評価票(Wylie and Ingram 1993)をもとに、日本語用に編成し直して、作成されたもので、自己評価票の表紙には、自己評価がプレースメントの資料となるので、正しく自己評価することの重要性、また、意味のある学習体験の

ためには正しいレベルに入る必要のあることが明記されている。

### 3-3. Stern の枠組み

Stern(1987) の理論的枠組みを使って、総合的な外国語教育の中での有効なプレースメントテストとはなにかを考察してみたい。Stern によると、総合的な外国語教育は言語能力開発の次元のみに留まらず、実体験、文化、そして、一般言語教育を加えた四つの側面から構成されなければならないという。評価が教育内容にもたらす影響ということを考えると、教育の一要素である評価、ここではプレースメントテストもこの四つの観点から検討する価値がある。加えて、ここでは信頼性への言及も行う。

表1にあるように、NSW 大学のプレースメントテストは、漢字、文法、読解、小作文、面接による会話と、言語能力の面ではさまざまな観点から評価を行っている。面接による会話テストは、会話の言語的な面に留まらず、言語行動まで広範囲に見るもので、学生が大学で教官の部屋を訪れると言う実際によくある場面で実体験をさせているといえる。これは、学生の面接場面における社会言語、社会文化能力をも問うものである。また、読解、小作文の素材のなかに文化的な要素があることから、文化の面への言及があるといえるだろう。しかしながら、一般言語教育への積極的な貢献がなされているとはいえない。また、この評価の妥当性、信頼性については具体的な調査をしていないが、ここでは経験的結果から成果が上がっていると判断する。

SPOT は、聞く、読む、書くの3技能を同時に使うテストだが、このテストが何を測っているかについては、作成者側もまだ考察中である。自動的になされる処理能力を測っているのではないか（フォード丹羽 1997）、タイミング技能も測っているのではないか（山元 1997）などの考察が行われている。しかし、SPOT は、漢字や、文章を書く技能、長文を読む技能、話す技能、言語行動など、測っていないと思われる部分も多い。実体験の面では、聞く、読む、書くの3技能が同時に行われるという、他のテスト体系と比較して現実の言語処理に近い状況が与えられているのが特徴である。しかし、テスト場面は現実とはかけ離れていて、Spence-Brown(1997) 中の Bachman and Palmer(1996)による現実性と相互作用性を欠いている。文化面では、SPOT が非常に日本的（東洋的<sup>3)</sup>なテストであることから、学習者にとって意味があるといえるかもしれない。時間制限を持ち、正解は必ず一つであること、多くの学習者に一斉に実施できること、非常にコンパクトで、だれにでも使え、いろ

いろな技能を測る多機能性があるといわれることなど、SPOT は、ウォークマン、最近では極小の携帯電話、多機能ノートパソコンの出現にも通じる非常に日本的なテストであると考えられないか。これには、ある種の学習者にとってはかなりのカルチャーショックとなりうるという消極的評価と同時に、日本文化の実体験であるとの積極的評価もできよう。言語教育の面では、前述の NSW 大学の現行プレースメントテストと同様、教育の指針への積極的な貢献は見られない。プレースメントテストとしての信頼性は評価が高いが、あまりに簡略なテストであるため、かえって、学習者の信頼を得ることができない (face validity がない) との指摘もある (Spence-Brown 1996)。

表 1 Stern の四観点と信頼性から見たプレースメントテスト

	NSW 大学	SPOT	自己評価
言語能力	漢字、文法、読解、小作文、面接による会話により、さまざまな言語技能を測定。	聞く、読む、書くの同時進行。測定しているのは総合的な即時的日本語処理能力か。	話す、聞く、読む、書くの四技能に関して自己評価。
実体験	面接による実体験。	三技能の同時進行が実体験に近いといえるか。	評価票の具体的記述により実体験を思い起こす形。
文化	面接場面の社会文化能力を問う。読解、小作文中に文化的素材あり。	日本的テスト文化の体験といえるか。	現行のものは特になし。評価票に文化的な記述を加えることにより可能か。
一般言語教育	特になし。	特になし。	自己評価による自己の能力に関する意識の喚起と自律学習の促進。
信頼性	経験的に成果をあげている、信頼性を確かめる調査はされていない。	他のプレースメントテストとや学期末テストとの相関が高く、信頼性が上がっている。	プレースメント場面では信頼性があるようだ。

自己評価の場合、言語技能の次元では、ここで使用してる自己評価票が4技能に分かれているため、学習者は4技能について自分のできること、できないことを考えさせられることになる。プレースメント場面での自己評価の信頼性については、トムソン (1997) が詳しく、この評価票を使った自己評価には、教師評価との相関が見られた。この自己評価場面には、実体験はない。しかし、

評価票の作られ方が実体験を基にしたもので、学習者が自己の過去の実体験を振り返って考えることになる。つまり、学習者の思考のプロセスでは実体験に言及しているといえる。文化的なものは今回の自己評価票には含まれていないため、また、自己評価という形態が日本の教育現場の伝統文化から外れているため、自己評価が文化の面で学習者に貢献しているとはいえない。今後、自己評価票に文化的な要素を加えることによって、文化を自己評価に反映させることは可能かと思う。

上述の二つのプレースメントテストで挙がってこなかった一般言語教育への貢献だが、自己評価の場合、学習者の自分の達成度、弱点などに関する意識の喚起、それによるニーズの発見、自己評価をすることによる自律学習能力の開発(Nunan 1996)、学習者のインプットによるプレースメントの実現など、有意義である。学習者は日常の日本語運用場面でインフォーマルな自己評価は常に繰り返しているものであるが(Oskarsson 1978)、それをフォーマルな形にすることで自己評価を意識化することになる。教育の過程の中の評価は、例えば、プレースメントのための情報を提供するだけではなく、なんらかの形で教育に貢献する形が望ましい。日本語教育プログラムの目指すところとして、学習者中心の教育、学習ストラテジーの習得、学習者の自律などが視野にあるのだとしたら、プレースメントの決定に自己評価を組み込む意義は大きい。

#### 3-4. Brindley の視点

Brindley(1990)は、評価と言うものを四つの角度から検討することを提案している。言語プログラムの資金源であるスポンサーや地方自治体の視点からの検討、プログラムを運営しているマネジメントの視点からの検討、実際に教えている教師の視点からの検討、そして、学習者の視点からの検討である。前二者は、プレースメントテストが余分な予算のかからない専任教師によって運営され、適切なプログラムが運営できるようなプレースメントの実績があがっているということを前提にここでは検討しない。後二者のうち、評価は比較的教師側の視点から議論されがちだが、ここではプレースメントテストを教師、学習者の二つの視点から検討する。

表2にあるように、NSW 大学のプレースメントテストに関しては、教師陣は、プレースメントの適切さに関してはかなり満足しているが、テストの煩雑さ、時間的制約に関しては大きな不満を抱えている。テスト教室の確保、テストの案内の徹底から始まり、会話テストの人材、時間配分、テスト時に受験で

きない学習者のための追試、テストの管理など、教師側の負担は大きい。また、このテストは学習者側からの視点には関与していない。面接において学習者と教師の間に相互作用が見られるほかは、教師陣が作ったテストの結果を教師陣が検討し、教師陣がプレースメントを行うという形である。プレースメントの結果については、学習者は概ね満足のようなが、事実上学習者不在のプレースメントになっている。学習者中心の日本語教育という考え方からも、また、自律学習の原点となる自己評価能力の開発という点からも、好ましくない状況である。

表2 Brindley の視点から見たプレースメントテスト

	NSW 大学	SPOT	自己評価
教師	教師が出題、運営、採点、プレースメントの判断をする。プレースメントの適切さには満足だが、長時間に渡る作業の繁雑さには不満。	基本的には教師が出題、運営、採点し、プレースメントの判断。出題は既成の SPOT の使用可。運営、採点は教師以外でも可。短時間ででき、簡潔。	教師が先行研究に基づき、より信頼できる、また、各プログラムの性質にあった自己評価の形態を決定。運営は教師以外でも可。短時間ででき、簡潔。学習者に評価を任せてしまうことへの不安。
学習者	学習者はプレースメントの適切さには満足のようなが。テストの実施に関しては、面接における相互作用はあるが、学習者はプレースメントの決定には関与していない。	こんな簡単なテストでいいのかという不安。テストの実施とプレースメントの決定に関しては、事実上学習者不在。	学習者自身によるプレースメントであるという利点。評価は教師によるものであるはずという不満。

SPOT の場合は、時間がかからないこと、テストの実施は教師以外の人間でも可能なこと、出題は既成の SPOT を使うことで必要なくなること、採点が簡単なこと、分析結果が出しやすいことなどから、教師の負担は軽減される。また、テストの信頼性の実績があがってきていることから教師側も安心して使えるようになりつつある。しかし、前述のように学習者側はテストがあまりに簡潔なため、こんな簡単なテストで自分の力が本当に測れるのかという不安を持つこともある。しかも、SPOT は教師による教師のためのテストであって、プ

レースメントの決定に学習者は直接関与できない。また、在日経験のない海外の初中級学習者に日本語の即時処理能力を要求することは不当ではないかとも考えられ、海外のプログラムにはそのまま使えないのではないかと懸念もある<sup>4</sup>。

さて、自己評価の場合は、教師側には SPOT 同様、時間の短縮が一つの利点である。自己評価票に記入してもらっただけなら 20 分程度で終わり、実施者側だけでなく、受験者側の負担も軽減される。次に、日本語教師でなくても試験ができるという利点がある。従来形では、特に面接試験は経験のある日本語教師が担当しなければならなかったが、自己評価の用紙を渡し記入させるだけなら、誰にでもできる。また、試験会場を用意する必要がない。自己評価は他のテストと違ってカンニングの心配がないので、どこでもできるし、うちに持って帰って記入してきても構わない。加えて、テスト問題が漏れる心配は、自己評価票では考慮にいれなくてよいので、テスト問題の厳重な管理とか、問題の作り替えの心配がない。また、学習者の自律を促進できるという利点もある。トムソン(1997)にはプレースメント場面での自己評価は信頼性があると出ているが、学習者に評価を任せてしまうことに不安を感じる教師がいることも事実で、SPOT で学習者が感じることと同様に、今度は教師側のこんな簡単な評価票だけで、しかも、学習者自身の自己評価だけで決めてしまっているのかという躊躇も見られる。学習者側から考えると、自分のプレースメントに自分が関与できるのがよいという考え方と、アジア系の学習者に見られがちな、評価は教師によってされるべきであるという考え方(Thomson 1996, 岡部・榎本 1997<sup>5</sup>)の二つが考えられる。自律学習促進の方針下では、自己評価による学習者からのプレースメントへのインプットは非常に重要だと思われるが、自己評価をしたくない学習者に自己評価のみを強いるのは学習者中心の考え方から離れてしまうので、自己評価と教師評価の併用が理想的といえるのかもしれない。自己評価の機会が数多く与えられることにより、自己評価の価値を学習者が徐々に見出ししていくことを望むものである<sup>6</sup>。

#### 4. 考察

以上、プレースメントテストの三つの形を Stern(1987), Brindley(1990)の観点から分析して見て、異なる視点から眺めることで各々の長所短所が浮き彫りにされた。特に際立ったのが自己評価以外の二つのテスト形式における「教育」



「学習者」の不在の問題である。プレースメントテストは学習者がその日本語プログラムと初めて出会う場面であり、そのプログラムの印象を形作る場面である。その場で、プログラムの持つ日本語教育に関する考え方や学習者に対する姿勢を示すことは非常に重要ではないか。学習者中心の流れと学習者の多様化の現実のなかでは、学習者の自律は重要性を増してきている。各日本語教育プログラムは、そのプログラムのもつ教育に関する考え方を示すことのできる、さらに、学習者のインプットを吸収する場を提供できる、そんなプレースメント・プロセスの在り方を今後も検討していく必要があるだろう。

プレースメントテストはそれぞれのプログラムにあった形のものであるべきで、一概には言えないが、プレースメントは、自己評価によるものと、教師評価によるものとを両者発表し、最終決定は学習者にゆだねるのがいいのではないかと考える。結果、学習者が教師の目から見て不適切なレベルに入ってきたとしても、それはそれでいいのではないか。そのレベルを体験してみて、二、三週間はレベル変更ができるようなプログラムの柔軟性を準備しておくことはもちろんだが、その時点で学習者と教師との話し合いがあるはずだし、その過程で学習者が自分の日本語能力、学習能力などについて真剣に考える機会を得る、つまり、自律学習の機会を得ることに意義があると思う。

過去、自己評価の信頼性は教師評価や客観テストの結果と比べて測られてきたが (Bachman and Palmer 1989, Pierce, et. al. 1993, 小山 1996, トムソン 1997 他)、はたして、その教師評価が、また、客観テストが妥当で信頼できるものかは別問題である。Brown(1995)には、観光ガイドの能力試験で、教師評価と実際に観光業界でその仕事に携わっている専門家の評価に開きがあった例がある。このとき、教師評価が正しくて、専門家の評価は正しくないといえるのか。また、自己評価と客観テストは初めから比べられるべきものではないのではないか。自己評価は自分の設定した基準に照らし合わせてする評価であり、客観テストは外部機関により設定された基準に基づく測定である(岡崎・吉武 1992)。何のための評価かを考える時、プレースメントテストには二つの交錯する意図が見える。教師側はできるだけ一様な学習者群を作りたい、学習者側はできるだけ自分が学習しやすいレベルに入りたい、と考える。個々の学習者にとって勉強しやすいレベルが自分より少し上手な仲間と一緒に勉強するレベルなのか、自分のほうが少し先を行くような仲間と勉強するレベルなのかは、教師には判断できない。教師は学習者の判断を信じ、学習者の「誤審」

を尊重して見ることも必要かと思う。

## 5. まとめ

本稿ではプレースメント場面を考察してきたが、日本語教育の評価一般において、テストから情報を得るというだけの評価ではなく、何のための評価か、総合的な日本語教育の観点から見て健全な評価か、教師の視点だけではなく学習者の視点を考慮にいれているか、この評価には情報提供のほかにどんな影響が期待、懸念されるかなど、視野を広く持った評価が望まれる。日本語教育の大枠のなかで、意義のあるテストの考案に自己評価が重要な位置を占めるであろうことは明確だ。

---

<sup>1</sup> 本稿の執筆は日本国際交流基金フェローシップ期間中に行った。基金の援助に謝意を表したい。

<sup>2</sup> SPOT のみで実際のプレースメントを行っているのは現在カリフォルニア大学サンディエゴ校だけである。「外国語としての日本語能力SPOT 研究をとおして見えてくるもの」筑波大学留学生センター、第四回国際シンポジウム予稿集より)

<sup>3</sup> 1997年8月30日に筑波大学で行われた上記国際シンポジウム閉会の挨拶中、シュテファン・カイザー氏は、SPOT が東洋的なテストであると発言した。

<sup>4</sup> ロビン・スペンス-ブラウン氏の上記シンポジウム、口頭発表より。

<sup>5</sup> 予稿集には記述はないが、発表中アジア系学習者の自己評価に対する反発が挙げられた。

<sup>6</sup> 段階を追った学習者の自律への支援の試みは西谷(1993)に詳しい。

## 参考文献

- 岡崎敏雄(1992)「日本語教育における自律学習」『広島大学日本語教育学科紀要』29-14
- 岡崎敏雄・吉武康行(1992)「日本語教育における自己評価」『広島大学日本語教育学科紀要』2 15-22
- 岡部真理子・榎本早苗(1997)「日本語学習者の自己評価—ビデオを用いた自己評価活動の試み」『平成9年度日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 小林典子(1997)「日本語学習者に対するプレースメントテストとしてのSPOT」『第4回 国際シンポジウム予稿集 外国語としての日本語能力の測定—SPOTをとおして見えてくるもの』1-7
- 小山 悟(1996)「自律学習促進の一助としての自己評価」『日本語教育』88号 91-103.
- 田中望・斎藤里美(1993)『日本語教育の理論と実践』大修館
- 筑波大学留学生センター(1997)『第4回国際シンポジウム予稿集 外国語としての日本語能力の測定—SPOTをとおして見えてくるもの』
- トムソン木下千尋(1997)「プレースメントテストの場での自己評価—自己評価の信頼性を高める要因—」審査中の未発表論文
- 西村まり(1993)「定住外国人の自律的日本語学習におけるテレビ番組の利用に関する研究」『平成5年度日本語教育学会春季大会予稿集』103-108 日本語教育学会
- フォード丹羽順子(1997)「言語運用における2種類の知識(能力)とSPOTが測定するもの」『第4回国際シンポジウム予稿集 外国語としての日本語能力の測定—SPOTをとおして見えてくるもの』67-72
- 山田 泉(1996)『異文化適応能力と日本語教育2 社会派日本語教育のすすめ』凡人社
- 山元啓史(1997)「測りたかったことと測れなかったこと」『第4回国際シンポジウム予稿集 外国語としての日本語能力の測定—SPOTをとおして見えてくるもの』87-91
- Bachman, L. and A. Palmer. (1996) *Language Testing in Practice*, Oxford University Press, Oxford.
- Bachman, L. and A. Palmer. (1989) 'The construct validation of self-ratings of communicative language ability.' *Language Testing* 6(1) 14-29.
- Brindley, G. (1990) 'Issues in assessment.' Plenary address to AMES Curriculum Conference, 30 March 1990 Australia.
- Brown, Annie (1995) 'The effect of rater variable in the development of an occupation-specific language performance test.' *Language Testing*. 12 (1): 1-15.
- Knowles, M. (1980) *The Modern Practice of Adult Education*. Chicago: Follett Publishing Company.

- LeBlanc, R. and G. Painchaud (1985) 'Self-assessment as a second language placement instrument.' *TESOL Quarterly*, 19(4): 673-687.
- Nunan, D. (1996) 'Towards autonomous learning: some theoretical, empirical and practical issues.' R. Pemberton, et.al. (Eds.). *Taking Control: Autonomy in Language Learning*, Hong Kong University Press. 13-26.
- Oskarsson, M. (1978) *Approaches to Self-assessment in foreign Language Learning*. London: Pergamon Press.
- Pierce, B.M., M. Swain, and D. Hart (1993) 'Self-assessment, French immersion, and locus of control.' *Applied Linguistics*. 14(1):25-42.
- Spence-Brown, Robyn (1997) 'The real world and the language tester: considerations of authenticity and interactiveness in the design and assessment of language tests.' 『第4回国際シンポジウム予稿集 外国語としての日本語能力の測定—SPOTをとおして見えてくるもの』 73-86
- Spence-Brown, Robyn (1996) 'Some issues in the use of the "SPOT" for lower intermediate students in an overseas setting: the case of Monash University' 小林典子編『日本語学習者に対するプレースメントテストとしてのSPOT』筑波大学文芸言語系
- Stern, H.H. (1987) 'Directions in syllabus design.' In M.L. Tickoo (Ed.) *Language Syllabuses: State of the Art. Anthology Series 18*:19-32, SEAMEO Regional Language Centre, Singapore.
- Thomson, Chihiro Kinoshita. (1996) 'Self-assessment in self-directed learning: Issues of learner diversity.' R. Pemberton, et.al. (Eds.). *Taking Control: Autonomy in Language Learning*, Hong Kong University Press. 77-92.
- Woodford, Protase E. (1997) "Language testing at ETS: Its development and evaluation." 日本語教育学会平成8年度第13回研究発表集会講演
- Wylie, Elaine and David Ingram (1993) *Australian Second Language Proficiency Ratings, Self-Assessment Version*.

(ニューサウスウェールズ大学、お茶の水女子大客員研究員)

資料：自己評価票の一部（話す技能）学習者は自分に最適なものを一つ選ぶ。

## SPEAKING

- 1-. I communicate in Japanese mainly with simple stock phrases. I can be 'creative' (i.e. say new things I have not learned as stock phrases) but any creative language consists of no more than a few known words combined, and I make so many mistakes that most people have great trouble understanding what I say unless the context makes it very predictable.
1. I can communicate in Japanese my basic needs and basic factual information in situations or on topics which are very familiar (e.g. I can conduct basic shopping transactions and outline how long and where I have learned Japanese). I can maintain a very simple conversation (satisfying minimum courtesy requirements) with a simple series of exchanges, using complete, though very simple, sentences (generally consisting of a single clause). I make a lot of mistakes and I may have to repeat myself often to be understood. I know some native language expressions may not be directly translated into Japanese.
2. I can speak Japanese well enough to take part in simple conversations in face-to-face situations. My language is 'creative' enough (see above) to allow me to interact as an individual, and complex enough to convey my simple opinions about familiar matters. I make a lot of mistakes, and I often have great trouble coming up with the vocabulary and structures I need. I am cautious enough to observe what is appropriate and what is not in speech, but it does not yet reflect in my speaking very well.
3. I can speak Japanese well enough to take part in face-to-face or telephone conversations, describing familiar things and relating familiar events, and conveying my opinions about them fairly precisely 'off the cuff'. I use a range of complex sentences (e.g. with 'if' and 'because'). I can use polite language to a very limited extent. I make a lot of mistakes, and I often have trouble coming up with the vocabulary, structures or appropriate expressions for the context I need. Beyond basic courtesy forms such as greetings, I have limited ability to tailor my language as outlined below in the more advanced descriptions.
- 3+ I am midway between the description above and the one below.
4. I can speak Japanese well enough to substantiate my own and discuss other people's opinions effectively in conversations or unprepared monologues, though I can't pursue my 'argument' to great depth. I make mistakes, though these rarely confuse or amuse the listener. In familiar situations I can generally tailor what I say and how I say it accompanied by appropriate body language to considerations such as the formality of the occasion and whether the person I am talking to is older or younger than me, though I can't always come up with the appropriate vocabulary or expressions.
- 4+ I am midway between the description above and the one below.
5. I can operate effectively in complex, in-depth discussions or monologues in social and academic or work situations in Japanese. My language is mostly accurate, fluent and appropriate to the situation. Someone might think I was a native speaker for a few moments, but they wouldn't be fooled for long.